

## 座談会

## 少子高齢化社会を生きぬく地域力を高める

～新たな絆<sup>きずな</sup>が結ぶ地域の形、地域の知恵！～

わが国では、2015年問題などを経て一段の超少子高齢化が予測されています。しかし、グローバル経済下での長期的な経済低迷により、国民年金や医療保険や介護保険等を支える財政基盤が崩壊しつつあります。にもかかわらず、政治の不安定さ等さまざまな要因により新たな社会システムの構築がなされないまま推移し、社会全般に将来の展望が描けないという閉塞感が強くなっています。

そうした中、個人主義や核家族化の進展、農村集落の衰弱と都市化の進展及びコミュニティの衰退などを受け、近年、都市部では孤立死などが頻発しており、絆や連帯が希薄化した「無縁社会」や「孤族」が大きな社会問題としてクローズアップされています。

特に北海道は、開拓移住を起源とする地縁血縁の希薄な土地柄であり、広域分散社会の特殊性などもあって、家族力や地域コミュニティが形成しにくい特性をかかえており、加えて、過疎市町村の多さや中山間地など条件不利地が多く、経済的な理由が即挙家離農につながるなど農村コミュニティの維持も非常に難しい面をもっています。都市部においても高齢者のみならず、離職・失職などにより孤立する人々が顕在化しや

すい地域でもあります。

現在、国政でも地方でも政治・行政・地域・住民などさまざまなレベルで、こうした少子高齢化問題に対応し、地域コミュニティの強化や都市・農村部での集住対策などの取り組みがなされています。

本特別企画では、各専門分野の方々に北海道の特殊性などを踏まえて、ハード・ソフトの両面から少子高齢化社会における地域づくり、また、地域力を高めるための方策を提言いただきます。

## 出席者

(50音順)

- 飯田 俊郎 氏 札幌国際大学スポーツ人間学部教授  
 岩見 太市 氏 NPO法人シーズネット代表  
 菊谷 秀吉 氏 伊達市長  
 佐々木 徹 氏 北海道総合政策部地域づくり支援局参事  
 笹谷 春美 氏 前北海道教育大学札幌校教授

## コーディネーター

- 金子 勇 氏 北海道大学大学院文学研究科教授





**金子** 本日のテーマで、幾つかキーワードを用意しました。一つ目は、北海道に見る少子高齢社会のリスクとタスク（課題）。二つ目は、日本の中での北海道の特殊性。その中から普遍的な解決策を出して、議論を広げていきたい。三つ目は、ハードとソフト。地域力はソフトだけ、ハードだけでは駄目なので、ソフトな面とハードな面を両方併せてご議論いただき、今後の北海道の地域力を高めるきっかけが得られればと思います。

**北海道の人口は20年後には82万人の減少**



**佐々木** 私の仕事は特定地域と言われている過疎、集落、離島の対策で、住み続けられる住んでいてよかったと言われる地域づくりをお手伝いしています。

北海道の総人口は、20年後にはおよそ82万人減少します。現在の函館市、旭川市、帯広市を合わせた人口がなくなるというイメージです。北海道は全国の減少率よりも高い割合で人口が減少していて、15～64歳の生産年齢人口の減少率が全国よりも大きく、北海道経済にとっても非常に大きな問題だと思っています※1。

地域別では、石狩市は人口減少が緩やかですが、それ以外の地域は全道レベルよりも10年前倒して急速に高齢人口の割合が増えていきます。平成22年度の単身高齢世帯数の高齢世帯における割合は33.7%で全国の

29.7%に比べて高く、32年度には最も多くを占めることになります。一人暮らしの老人が多くなることは、注視しておかなければなりません。

次に、人口動態の推移を見ると、近年は自然動態、社会動態ともにマイナスですが、自然動態は高齢化すれば死亡者数も増え、出生者数が伸びないということで減少数が大きくなっています。社会動態では従来から、北海道から出ていく人が入ってくる人を上回っていますが、23年度には東日本大震災の影響で転入・転出の数が接近しています。札幌市の転入・転出のデータを見ても、3.11以降に増えています。

札幌市は確かにまだ転入増の傾向はあるのですが、25～34歳という働き盛りでは転出が多い。大学入学で入ってくる人は多いのですが、その後は転出する割合が大きい。高齢者の転入は年々コンスタントに増えており、年を取ったら地域にいない必要がないから札幌市に入ってくるということが今後、増えてくると思います。そうした点で、気になります。

**新しいコミュニティの在り方を模索**

**菊谷** 伊達市は旧大滝村と飛び地合併しましたが、ここは過疎化と高齢化がすごい勢いで進んでいる地域で、どうすればいいかという課題を抱えています。



そうした中、地域のコミュニティがどうなっていくかが心配です。自治会の加入割合がどんどん減って70%まで下がっています。一番いい例が老人クラブで、平成14年に約20%あった加入率が現

図1 北海道の年齢別人口割合の推移

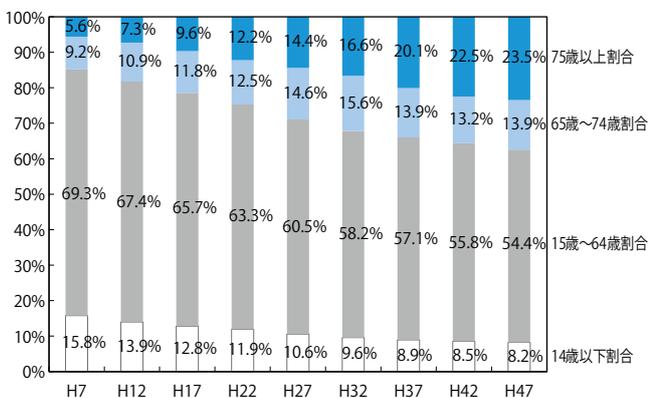
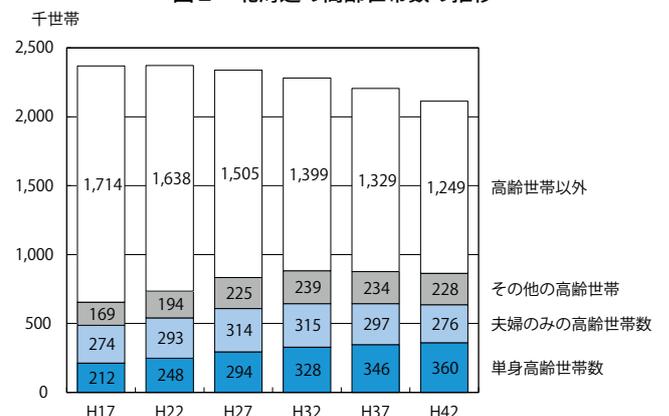


図2 北海道の高齢世帯数の推移



※1 平成22年度までが国勢調査のデータ。27年度以降は国立社会保障人口問題研究所の将来推計人口による。

在16%です。田舎でもコミュニティが失われてきています。さらに、最近、社会的な問題になっている引きこもりが高齢者にも及んでいるという気がしています。

過疎が進む旧大滝村には集落が十ぐらいありますが、本当に今のままで維持していけるのかということで、冬期集住の提案をしました。高齢者が冬期集住をする場合、高齢者に家賃の負担をしてもらわねばいけませんので、除雪費用などの無駄を削ることで、賄えるのではないかと考えています。70代、80代の人にとっては冬期集住の方が良いので、みんなが集まって暮らすことで行政コストを下げ、公共交通を含めた行政サービスを上げていけるのではないかと考えています。

もう一つの課題が、民生委員や児童委員のなり手がいないことです。高齢者の話を聞くと、「民生委員に世話になりたくない」という方が多い。一方、民生委員に聞くと、高齢者の家を訪問しても「ほとんどドアを開けてくれない」。どうしても「やってあげている」という態度が出てしまって敬遠されるのだと思います。どうすればいいのか。これからの実験で結論は出ていませんが、国土交通省のシルバーハウジング制度を使って、本年7月から駅前再開発で建てる市営住宅に入れようと考えています。引きこもる高齢者は若い人が声をかけると素直に聞いてくれる。そのために制度をうまく使いたい。また、「ボランティアではなく市のサービスだ」と言うと意外と受け入れてくれる。これがどこまで可能か、これからの実験を通して進めていきたいと思っています。

次に、コミュニティの在り方として、従来型のコミュニティはもう難しいのではないのでしょうか。老人クラブが典型です。好きなときに好きなところに集まるといったイメージにしていかないといけない。問題はだれがコーディネートするかですが、LSA<sup>\*2</sup>にコーディネートさせて、いろいろな機会を与えていきたいと思っています。その中には、自分の好きな時間に働けるという考え方があっていいと思います。昨年3.11

で被災されたイチゴ農家が集団で移住して来ましたが、そこで実験しているイチゴ栽培が順調にいきそうなので、そこでの新しい働き方も導入していきたいと思っています。

#### 地域包括ケアをどう具体的に

**笹谷** 私は家族社会学が専門で、特に高齢者の家族介護の研究をしています。



高齢者介護をめぐる問題は、全国レベルで社会問題化しています。今年2月には札幌市白石区で障がい者の妹をケアしてきた姉が病死したため、そのケアを受けられなくなった妹が凍死する事件がありましたが、高齢者のケアでも、認知症の夫をケアしていた妻が急死して夫が餓死したり、未婚の息子による老親と心中や殺人のケースなどが相次いでありました。いずれも介護者と被介護者の2人暮らしで周囲から孤立しており、発見も遅れたことが共通しています。つまり、家族の介護力がなくなっている中で、介護を引き受けざるをえない家族介護者は非常な負担を強いられています。未婚の男性は今まで介護者としてあまり期待されていませんでしたが、そうした技術も乏しく介護力の低い人たちが一人で介護しなければならない状況も社会問題としてとらえなければなりません。

では一体、北海道の高齢者介護の実態はどうなっているのか。私は、財政破綻した夕張市で高齢者介護の調査や、一昨年の道社協の全道の老老介護の調査も担当しましたが、北海道は高齢化率が全国に比べて高く、家族の縮小化が早く進んでいるため、一人暮らしや後期高齢者同士の介護、要介護者同士の介護、認認介護など、身体・経済・社会関係等の複合的なリスクを抱えたケースが多いように思います。まずはリスクの洗い出しを行い、有効な対応策をうつことが必要です。しかし、行政だけではできません。地域のボランティア、NPO、家族も含め、介護力が弱まっている人たちが参加できるようどうサポートするかが問題です。

\*2 LSA (Life Support Adviser)  
生活援助員。

都市と過疎地域では違った様相があると思います。札幌市の第5期の高齢者福祉計画と介護保険推進計画に携わりましたが、そこでは2025年を目標に、地域包括ケアをどうつくっていくかが課題になっています。介護と医療の連携や地域住民の参加という形で、ケアを軸とした地域づくりをこれまで進めてきた地域づくりの中に重ねていくことが重要です。

#### 老老福祉から世代間循環型のコミュニティづくりへ



**飯田** 私も社会学が専門で、都市と家族を研究しています。東京・青森を経て、1999年に札幌にUターンして間もなく、札幌市社会福祉協議会からの依頼で、地域のコミュニティづくりについて調査・提言をしました。

当時は「これから団塊の世代の男性がいっぱい入ってくるから、地域社会は安泰だ」という声もありましたが、実際にはそうはなりません。彼らは自分のライフスタイルを追求するために田舎暮らしをしたり、伊達市に移住することを望みました。同じ地域に残った人の多くは、まだまだ働きたいと思っています。それでなかなかコミュニティに参加しないという現実を見てきました。

しかし、そうした話をしてしていると、地域の高齢の担い手の方たちから「団塊の世代の問題もあるが、子育て世代の『あなたたち』は何をしているのだ」「地域で子供の安全の見守りをやっているのは高齢者ではないか」とずいぶん言われました。そこで、清田区の北野、南区の澄川、東区の元町の3地区では、子供を教育する中で親を引きずり出す方法を探っています。自分の子供が地元の高齢者などに見守られて育ったことを、子供の活動や言葉を通して親に知らせ、子供が成長したら今度はボランティアでお返しさせるという発想です。ごみの分別も、子供によく教えると、子供が親に注意してしっかりさせるという話があります。

そのお返しの一つが、中学生になったら高齢者のために除雪をしようという取り組みです。子供が中学生

になったころには、一人前のボランティアになるように親が支援し、子供を朝、除雪に行かせる。子供が行けないときは親が行くということで、子供を教育しながら親を育てていく、「PTAを引退させない」という言葉を澄川地区では聞きました。

そこで行き着いた答えは、「老老福祉から世代間の循環型のコミュニティづくりへ」です。札幌市の福祉除雪の担い手の平均年齢は68歳、一番多い年齢は73歳です。73歳の高齢男性がおばあちゃんのところへ行って除雪しています。老老福祉ですが、「これは恥ずかしいことではないか」という声が地元で上がってきて、「もっと若い世代、男性のPTAも立ち上がるべき」という声が聞かれるようになりました。そこで今、注目されているのは「おやじの会」です。ただの「飲み会だ」という声も聞きますが、マイホームを買って移り住んで、これからはこの土地で仲間を作って頑張りたいという気持ちが出ています。

言いたいことは、「循環型コミュニティ」ということです。子育て、防災、防犯、除雪といったいろいろなことがあります。結局は若い世代が高齢の方を助けなければいけない。若いうちからかかわっていき、歳をとったときに「今度は自分に安心をお返ししてもらおう」ということです。

青森県に住んでいたときに驚いたのは、地域で中年男性にいっぱい出番があることでした。40～50代の男たちが地域ですごく頑張っている。札幌市のような都会ではそれを意識的に計画的にやらなければ無理です。学校は親を教育する場所としていききっかけになると思ったのです。

#### 仲間づくりと役割づくり

**岩見** 私は京都の出身で、札幌市に来て27年になります。介護保険が始まる前から札幌市の社会福祉協議会と関わりがあり、高齢者の暮らし方が非常に気になっていました。豊かな高齢期を生きるにはどうしたらいい



いか、私が当事者の立場になってNPO法人シーズネットを立ち上げました。子育てや仕事人生が終わって、残り20、30年の人生の新しいグランドデザインを自分たちで作っていかうというものです。自立を前提として、「仲間づくりと役割づくり」というキーワードで活動しています。

私が気になっているのは、北海道の三つの特徴です。一つ目は、家族力の弱さです。都会、地方にかかわらず、親子別居が当たり前になっています。一人暮らしで、しかも子供の世話にならない。でも子供の世話にならないでやっていく自信はない。

二つ目は、北海道は病院、施設一辺倒の世界だったということです。病院や施設が非常に充実していたから、本州に比べて在宅介護の歴史がほとんどない。行政も積極的に老人ホームや病院に入ることを勧めてきました。それが今、急ブレーキがかかっています。そこで、要介護、病弱になったらどうするのかという問題があります。

三つ目は、コミュニティの問題です。北海道のコミュニティには、本州のような精神基盤がありません。今、札幌市で私たちは高齢者の住み替えの支援をやっていますが、孤立してしまうという傾向が出ています。町内会の加入率が低く、老人クラブの加入率は6%しかありません。これまでとは違ったコミュニティを作るべきではないかと思えます。

私は「地域家族」という言葉を使い始めましたが、とにかく、地域の中で「人と人がどうつながるか」。もう一つは、暇なときに「気軽に行ける居場所」をどうつくるか。「自身の存在感」を地域の中でどうつくるか。この「三づくり」があります。家族ではなしに住民同士が自分でできる範囲のことでつながっていかう。元気なときだけではなく、病気になっても頑張れる何かがあるという流れをつくれなにかと考えます。

だれにも看取られずに亡くなっている北海道民、札幌市民が非常に多いということも気になっています。最期の死を地域の中で迎えるという新しい発想が必要

になっています。

#### 家族力が弱く病院や施設に依存してきたが…

**金子** たくさんの課題を出していただきました。

一つは、家族力が弱いという指摘です。平均世帯人数が少なく、家族として何かをやるという力が弱い。これには、介護と虐待の問題の両方があって、家族で何かしないといけないのに、手が回らないという問題があります。二つには医療や介護を病院や施設が肩代わりしてきたという北海道特有の歴史があります。しかし、在宅に戻そうという方向が打ち出された現在、どうするのかという話です。第三に、地域の中でのつながり、協力の度合いが落ちてきています。これら三点は、現代日本を考えるうえでのリスクとしても必ず触れられる問題ですが、なかなか答えが見つからない。

#### 家族力、地域力が落ちてきたときの支えはやはり行政

**金子** 菊谷さんが言われた、ボランティアよりも市のスタッフが行くと応じてくれる、という住民の意識は何を意味するか。家族が小さくなり、地域の力が落ちたとき、支えは行政だったということにはもっと耳を傾けるべきだと思いました。

#### 行政改革で雇用の付け替えを



**菊谷** 私は、雇用の付け替えをしようと言っています。無駄なところをやめて、必要なところに雇いを付け替えていく。ただし、市の職員を増やすのではなくて、社会福祉協議会で雇を増やしていきます。今年7月からオープンする施設はとりあえず臨時職員で運営するのですが、若い人を雇用して、1年雇って使えそうだったら正職員にして、パートやスタッフも置いて、将来、数を増やしていかうと考えています。

#### 男の居場所づくり

**菊谷** 岩見さんが言われた「居場所」は、特に男の居場所です。私は歌声喫茶がいいと思います。80歳以上の高齢者が集まると決まってカラオケと日本舞踊、みんな飽き飽きしている。地域の会館みたいなのところに

好きな時間に行って、好きな歌を歌い、嫌だったら帰ろうという仕組みでやった方がいいと思います。

家族力が弱いという点では、いろいろな地区や集落に行って「みんなで一緒に暮らさないか」という提案を何回かしています。1人や2人という農家がいっぱいあります。ところが、「やっとだんなが死んで一人暮らしになったのに、今さら何で一緒に暮らすの」と（笑）。80歳ぐらいで元気な女性はみんな「ノー」と言います。それをどうやるか、非常に難しいというのが実感です。

**金子** 集まって暮らすのは嫌だけど、臨時で集まるのは問題ない。歌声喫茶やおやじの会など自主的に集まれる環境は欲しいということですね。

**菊谷** そうです。友達はたくさん欲しいのです。

#### コーディネーター役を育てる

**岩見** シーズネットでも今、合唱や歌声喫茶などのサークルを30幾つやっていますが、いいコーディネーター役の世話人がいるかどうかで、全然違ってきます。横型社会にあって、人と人をつなぐ市民をどう育てていくかが大きなテーマになってきます。

**飯田** おやじの会は1回入ると、魅力があってなかなか抜けません。地域の核になるような新しいグループができれば、その中から町内会のニューリーダーが育つのではないかと考えています。

**金子** 何とか養成講座というのが時々ありますが、コーディネートができる人はあまりいない。コーディネートのノウハウは教えられますが、受けた人がやるかどうかは別問題。何となく自然発生的なものがあるような感じです。

**飯田** 「地域の人気者」みたいな人で必ずはまり役の人が地元にありますね。

**岩見** 町内会を例に取っても、役員の方々がいまだに縦型で活動しているところも散見されます。町内会長なんかも女性が半分以上になってくれば、地域は変わるのではないのでしょうか。

**菊谷** 敬老会があると市長はお祝いに足を運びます。

松、竹、梅の席に座っている人たちは、盛り上がっているのですが、後ろの席に行くと、みんな早く帰りがっている（笑）。「もういいや、敬老会なんて」という声が多いのです。一方、老人クラブではない高齢者の集まりに行ったら、すごく楽しそうなのです。聞いたら、「儀式がないから」と言うのです。男社会は式次第がやたらに長くて駄目ですね。

**飯田** 団塊の世代の人もそういうのを避けて、入ってこない。

**岩見** シーズネットは自立した会ですから、活動に参加するたびに300円を払う受益者負担制度です。最近会員数が急増してきて、今、会員が950人近くいます。男性が入ってきています。新しい参加の仕掛けがすごく必要だと思います。

**金子** 引きこもりの逆ですね。自分で探して、お金を払ってでも出かけて参加する人が多い。ハードの面で、そういう場所的なものはどうなのでしょう。

**岩見** 気軽に行ける場がなくて、札幌市でも助成金を出しているのですが、問題はいいコーディネーターがいないことです。横型の新しいリーダーシップの育成を行政にぜひやってほしい。

**金子** 行政がやったからといって育つものではなく、現場でもまれ、気づいたらリーダーになっていたというケースが多いという気がします。

#### アウトリーチが必要



**笹谷** 孤立死の事件を見ても、今の厳しい社会状況や個人情報という時代では民生委員では扱いが難しくなっています。専門的な力量を持った人がアウトリーチ<sup>※3</sup>して、困っている人のところにいかに足を運ぶかが求められています。年1回は一定年齢以上の住民全員に対してアウトリーチし、「どうですか。困っていることはないですか」とできる専門家が絶対必要です。

**菊谷** 伊達市では今年からLSAを配置して、25年度か

※3 アウトリーチ (outreach)

英語で手を伸ばすことを意味する。福祉などの分野で多様され、医療、福祉関係者が直接出向いて心理的なケアを行なうとともに、必要とされる支援に取り組むこと。

らLSAが「市のサービスです」とアウトリーチを実際にやります。市営住宅を建て、そこを拠点に二、三の町内会、300~400世帯でやって、よかったら広がっていくと思っています。

**菊谷** 伊達市の乗合タクシーの午前2便の定期便は、市街から3km以内は300円、一番離れた14~15kmの普段は2,000円かかるところが新しい制度では500円で乗れるようにしましたが、みんな乗らないのです。広報に載せ、新聞の折込みも入れて伝えているつもりですが、「全然知らなかった」と言うのです。アウトリーチで直接会って話さないで、せっかくなかった制度さえ利用されないという感じがします。

#### 仲間づくりが先か、役割づくりが先か

**金子** 岩見さんが「仲間づくりと役割づくり」と言いましたが、役割づくりは、別に除雪でなくてもいい、春であればお花見でもいい、いろいろなものが仕掛けられる。仕掛ける主体は民間の人で、最終的に行政もいろいろな形でかみ合っていくのがいいのではないかと思います。

**佐々木** 行政、民生委員や児童委員、ボランティアを一つのユニットにして、高齢者に紹介する。ボランティアの人が目や耳になって、何かあったら民生委員が駆けつける。そうでもしないと、民生委員が一人当たり30人ぐらいの老人を担当してきたのが、40人、50人となって、月1回も回れない。ユニットで見守ることが必要だと思います。



**金子** 仲間づくりの現場で、自分たちのグループが別の役割をつくっているという感じはありますか。

**岩見** そこらへんが実は難しい。趣味だけで満足してしまって、役割の方につながっていきません。ただ最近、合唱団など趣味活動をボランティアに活用しようとするサークルも出てきましたが…。

**金子** コーディネーターは、そういうところから生み出されてくるのではないのでしょうか。地域包括ケアの

ように専門的な力が要るところではどうでしょうか。

**笹谷** 今は、医療と介護と福祉の連携が必要とされていますが、必ずしも十分ではありません。特に過疎地では地域の介護資源そのものが少ない中、それらをつなげ、調整するコーディネーターの存在が重要です。現状はケアマネージャーの力量に依存しています。

#### エンパワーメントが必要

**笹谷** 家族を介護資源という視点だけでなく、介護をされる高齢者も、介護をする人も、その人その人の人生の豊かさを維持できるような介護関係であってほしい。介護のために犠牲になるとか、社会的参加ができないということがないような介護政策が必要です。高齢者自身の意識改革・エンパワーメント<sup>※4</sup>も必要です。若い人たちの協力も必要です。

子供が学童保育にお世話になっていたときに、お父さんたちが「おやじの会」を作ったのですが、ほかの家の子供の面倒も一緒に見る開かれた家族ができていました。それが「地域の家族」です。介護のレベルでもそういうふうにつながっていけばいいと思います。

#### 空き室をマンションの介護病室に

**岩見** マンションでは、独り暮らしになって要介護になったら住み続けられません。私は、「空き室をマンションの介護病室にしたらどうか」と管理組合に提案しています。要介護になったら移ってもらおう。そこに3~4人、要介護の人が集まる。同じマンションの友達が気軽に立ち寄れる、在宅介護・医療を組み込み、施設でもない、病院でもない、要介護の居場所、最後の場所にするという発想が地域で求められているのではないかと思います。

**飯田** 伊達市の「安心ハウス<sup>※5</sup>」がまさにそれですね。

**菊谷** 阪神・淡路の大震災のときに県や神戸市がつくった高齢者の復興住宅を2年前に見に行ってきました。自治会の役員の人に会って話を聞いたのですが、最初はそれぞれの団地が理想を持ってやっていたのですが、1人死に2人目が移りとなり、せっかくできていたコミュニティがばらばらになってしまった。「何

※4 エンパワーメント (empowerment)  
自立する力をつけること。

※5 安心ハウス  
それぞれの生活スタイルを活かし、必要に応じて介護サービスなどを受けることで、安心・快適に暮らしていける住宅。種類によって住宅型安心ハウス、施設型安心ハウス、グループホーム型安心ハウス、さらにそれらにデイ・サービスや訪問介護事業所などを併設したものが考えられている。伊達市では、伊達版安心ハウス認定制度を制定（平成17年）、良質な高齢者向けの賃貸住宅を民間活力を利用して普及促進することとしている。

年か前までは本当に楽しかった」。フロアに必ずそういう部屋があってみんなが集まっていたのに、「今はほとんど来ない」というのです。

行政が部屋を空けて今のお話のようなことをやれば、非常にいいアイデアだと受け取りました。

**飯田** コープさっぽろの「トドック」という宅配サービスが私は好きではありませんでした。買い物に出ない人を宅配で孤立させる、というイメージがあって。しかし、最近、コープさっぽろは高齢者専用住宅に小型店を開いたり、買い物が不便な地域に移動販売車を走らせています。おかげで週1〜2回、移動販売車ではお祭りみたいなにぎわいができるといいます。

**金子** 生協では無料の送迎バスも部分的にやっています。企業でも高齢者シフトはやっています。

#### 家族に周りが立ち入れないという問題が…

**金子** 高齢者の独り暮らしの問題や児童虐待を見てくると、家族の中に立ち入れないという問題に気がつきます。児童相談所だけが入れるのですが、時間をかけて証拠集めをしていると、結局、手遅れになるという悪循環がずっと続いています。介護や育児に虐待の危険性がつきまとい、何とかしなければいけないのに、家族力が弱くなったまま、周りも家族の中に入れない。そういう問題が高齢者向けでも児童向けでも強くなってきているような気がします。そこに風穴を開けるためには、行政として何が必要でしょうか。

**菊谷** 最近、引きこもる大人が出てきましたが、先行き不安が根本にあると思うのです。そうした世代の将来不安にどう応えられるか、そういう社会的な安心が基本にない限りは、ちょっと難しいと思います。

**岩見** 気になるのは、家族で孤立していることです。最近の孤立死は、夫婦や親子と一緒に死んでいる。家族だけでつながってしまって、ほかに広がっていかない。だから、私が市民活動として訴えていることは、家族だけで閉じこもるのはやめようということです。とにかく、ほかにいい友達をつくらう。そういう意識を持ってもらうことがすごく必要になっています。

**飯田** おせっかいなボランティアの人は家族の中にも入っていきます。札幌市で一番高齢化しているもみじ台の市営住宅に「黄色いエプロンの会」というおばさんたちがいて、最初はよろず相談をやっていたのですが、分別を間違った人のところにごみを持って行って、「こうやるのよ」と分別を教えることがメインになってきました。プライバシーと言われると動けませんが、「この人だったらいい」という人がいればいいのです。

**金子** 一つのことでは入れれば、あとは広がりますから、最初のきっかけをどうつくるかが問題です。

**飯田** 近所付き合いに突破口を求めて、その人たちを、民生委員、児童委員のグループに組み込んでいくことが必要です。

#### 地域力を高めるためには

**金子** 家族が弱くなって、代わりが幾つかつくられていること自体も地域力ですが、その力をつけていくためにはどうするか。地域力を高めて何かをする側にはどんな課題があるか。臨時の集合体をつくれるような雰囲気、場所づくりについてハードとソフトに分けた場合のやり方はどうか。とにかく、集まるのが大事だと思います。

#### にぎわいのあるところを利用して場をつくる

**飯田** 人が集まっているところ、にぎわいのあるところに役所やボランティアのセンターを置くという発想が必要です。

**笹谷** 人間は目的がないと集まりません。今までだったら、何歳以上になったら地域の老人会に参加するということが当たり前でしたが、現在は老後の生き方も多様化し、地域の既存の組織に参加する意識も薄らいでいます。自らを「老人」と認めたくない人もいます。だから、何のために集まるかが重要なことですが、孤立の不安を抱える中で、近所で気軽に集まれるお茶飲み場が欲しいというのは大方の気持ちです。場所は行政がサポートする。

#### 地域住民のニーズを把握

**笹谷** 専門家や行政が上から目線で「こんなものがある

ればいい」と言っても、きちんと地域住民のニーズをとらえなければ、ついてきません。住民・行政・NPOなどで緩やかな地域コミュニティ委員会といったものを設けて、地域住民も地域をつくっていくことにかかわっていく。地域をベースに住民のニーズをつかんだ新しいサービスの開発が求められています。その中で行政の新たな役割が求められています。

#### 地域で高齢者を生かす働ける場を

**金子** 日本一長寿の長野県では、高齢者の就業率が日本一で、1人当たりの老人医療費が一番安い。なぜ安いかというと、介護も看護も家族の中である程度できるので、長期入院が少ない。サラリーマンと違って、農業は自分で定年が決められる。元気なうちは農業をする、働くということが、コミュニティにとって大切なことです。伊達市では今、イチゴ農家が注目を浴びていますが、そういった面でもいかがでしょうか。

**菊谷** イチゴもそうですが、市の施設を壊した後に1,000~2,000本のアロニアという小さな果樹を高齢者の方々に全部植えてもらいました。業者が買ってくれるようになったので、あと2年ぐらいで収入にしていきます。うまくいったら、物を育てる楽しみをあちこちに広げていきたいと思っています。

**金子** そこには若い人たちも入りますから、他の世代との関係ができますね。

**菊谷** 私のイメージでは、若い人が経営者なのです。収穫作業は1日数時間でいい。それを高齢者や障がい者にやってもらう。去年は研修用の施設、今年は生産者の施設を建てます。障がい者や高齢者が研修を受けて、イチゴ農家が「この人が欲しい」といったら、ドラフトする仕組みをつくりたい。作業を行なう高さ調節ができるので、障がい者でも自分の高さに合わせてイチゴをもぐことができます。自分の好きなときに好きな場所で働けるというのは、生きがいにもなります。

**金子** 高齢者が頑張ってイモを植えてイモ焼酎を作ったらうまくいったという例があります。特に過疎地域では、コミュニティビジネスの発想や戦略が大事です。

コミュニティの基盤が弱くなった原因の一つに、人口移動が激しく、住み替える人が多くなったことが挙げられていましたが、伊達市ではそれを逆手に取ってうまくいきました。住み替えた人たちがもっと高齢化したときには、介護・医療の問題が出てきます。しかし、同じ住み替えでも、引き取った方はうまくいったという例なので、同じ人口移動でも、評価の基準が変わると実に学ぶことが多いという気がします。

#### 大都市での地域力

**金子** 札幌市のような大都市での地域力はどうか。北海道全体の底上げになると思いますので、最後にそのあたりを提案していきたいと思っています。

**飯田** 札幌市でも住んでいる人が高齢化し、介護病室をつくるような新しい取り組みをやっているマンションがあります。居住者が退職したら、逆に元気になったマンションをモデルとして、取り組みをどんどん広めていく必要があります。



一戸建で空いている家の処分に困っている人がいっぱいいます。それをリフォームして、公営住宅の代わりに貸し出すのを手助けする。東急鉄道が沿線の高齢化した住民の家をリフォームして安く売っていますが、北海道でも応用できます。

私が札幌市に提案したのは、空いている市営住宅に大学生を住ませて、ボランティアをさせることです。大東文化大学が板橋区の高島平団地でやっています。ボランティアを条件に家賃を半額にし、減額分は大学と行政が折半して補助するものです。

また、札幌市立大学の学生の提案は、芸術の森あたりに4~5人の仲間で一軒家を借り、アトリエにして一緒に住もうというものです。高校が統廃合され、家から遠くて通えない高校生が出てきたら、近辺の空家を寮代わりにして住ませ、ボランティアをさせる。そういったすき間があると思います。

### 夕張市における地域包括ケア

**金子** 夕張市における地域包括ケアと、札幌市のように社会資源がたくさんあるところとは、どこが同じで、どこが違うのでしょうか。

**笹谷** 夕張市では、介護保険サービスが最低限の介護保障を担っています。ところが、人口流出の進行や財政破綻で、これまでの自治体独自のサービスや地域の助け合い、インフラがなくなっています。特に、専門的医療施設の不足で、岩見沢市や札幌市まで行かなければならないということになれば、住めなくなってしまいます。地域医療や地域介護といった、地域を視点に置いた新しいサービスを組んでいかなければなりません。ただ、夕張市も広い地域に分散して住んでいますので、コンパクトシティではないですが市営住宅を高齢者の集合住宅に建て替え、居住とサービスの提供を行う試みがなされています。

高齢者は「そこに住み続けたい」「行くところがない」ということで、住み続けるための困難が二重、三重にあります。これは中年層や若い人にも共通した悩みです。その中で、社協や介護・医療の専門家・住民が自主的な地域づくりの組織をつくり、互いに支えあう動きもあります。

**金子** 冬期だけ集まるという話はいかがですか。

**笹谷** 難しい。孤立化したマンションに移るのは嫌があります。集合住宅で、少し共用部分があるようなところだと比較的受け入れやすいと思います。老老介護の調査でも、北海道では夫婦規範が強くて、どちらかがいる間はどちらかが面倒を見て、子供の世話にもなりたくない、居住の場を変えることを嫌がります。

### 人とつながる集合住宅での仕掛けづくり



**岩見** 私は関西人だから、行政依存ではなしに市民の力をどう高めるかということで考えます。今の札幌市内の住み替えは、郊外から街中のマンションへの住み替えが非常に多い。それが孤立化につながってきて

います。私たちは先月から、UR都市機構<sup>※6</sup>の集会所をサロンの場とする運営を委託されました。もみじ台の管理センターの運営にも協力することになりました。集合住宅で住民同士が結びつく仕組みづくりを地元の方々と一緒に協力して進めたいと思っています。

あとは、私自身が病氣療養の身ですから、要介護、虚弱になったときに地域の中でどう生きるかということもきちんと考えたいと、強く思っています。

### 社会的流出の最大の理由は医療

**菊谷** 伊達市でも人口の社会的流出がすでに始まっています。持病やそのリスクがある人、年金をある程度もらえる層は田舎をすぐ捨てます。それが極端になってきました。例えば、伊達市周辺の町村の人は今まで、親戚も近くにいるということで、退職したら伊達市に来ていたのですが、札幌志向が強くなっています。その最大の理由は医療です。

それと、地域社会に長くいると、しがらみが嫌になり、捨てたいと思う人がいる。そういう人たちをどうやって引き止めるかが、深刻な問題です。

首のヘルニアを患い、整形医を探していて分かったことですが、部位ごとに有名な専門医がいて、札幌圏に集中しています。地元には専門医はいませんから、うまくやらないとますます一極集中が進みます。人がいることによっていろいろなことが生まれるのですが、生まれることすらなくなる可能性があります。地方では、それを上回る魅力をつくらないと厳しいというのが実感です。

### 地域にあるよさをわかってもらう努力も

**金子** 北海道庁としては全体に目配りしなければいけないということで、医療圏の問題も医師会と一緒にやられていますが、適正配置という点ではいかがですか。

**佐々木** 北海道では去年の段階で99集落に絞り込み、集落の代表者から具体的な意見を聞いて、今年、調査報告を出します。医療問題は当然ですが、調査結果で明らかになった点は、生活をしていくうえでの心配、不安が非常に多いということです。足の確保が大きい

※6 UR都市機構  
独立行政法人都市再生機構。URはUrban（都市）Renaissance（再生）の頭文字。

という話やコミュニティの問題もあります。ただ、今日のお話をうかがってなるほどと思ったのは、札幌に住んでいる人は、おやじの会とか言って自分の居場所をつくろうと頑張っていますが、私のいた占冠村では、そういうものは普通にあるということです。それがまさしく地域のよさなのです。今そのよさがどんどん失われつつありますが、世代軸での循環コミュニティは地域では当たり前にあることを、皆さんに認識していただくことも必要だと思います。そして、地域から出ていきたいと思っている人を引き止めるためにも、地域にこういうよさがあると分かていただく努力をしなければいけないと、改めて感じました。

### 2015年問題の解決に向けて

**金子** 地域力への出発点は、「集まりやすさ」をつくるところにあります。札幌市の場合はどこへでも動きやすいのですが、過疎地域に行けば行くほど動きにくい。それを念頭に置いて地域を支援することが大事です。



また、おやじの会の話で出てきたように、結びつきの楽しさをどういう形で仕掛けていくかということがあります。役割づくりでも仲間づくりでも、とりあえずは趣味から始めてもいいと思います。

ケアの問題では、ケアマネージャーをはじめとした専門家がかわっていくことが必要です。いろいろな資源を導入する形でいくしかありません。

いずれにしても2015年に団塊世代が全員退職して年金受給者となるときには、このままで高齢社会の年金も医療保険も介護保険も立ち行かなくなります。それを意識して、国はもちろん北海道や市でも「2015年問題」を想定した制度改革をしてもらい、そこに高齢者がかかわれることをやっていくというメッセージを発信し続けることが、最終的には地域力につながるのではないかと思います。

(本座談会は2012年4月27日に札幌市で開催しました)

## profile

### 飯田 俊郎 (いいた としろう)

1965年生まれ。87年北海道大学文学部卒業(家族社会学専攻)。93年東京都立大学大学院博士課程単位取得退学(都市社会学専攻)・青森大学社会学部専任講師。99年札幌国際大学社会学部准教授・2008年教授。現在はスポーツ指導学科で中学・高校の保健体育教員を養成(地域社会学を担当)。北海道の地域振興とコミュニティ形成の調査・政策提言と同時に、国際移民・国内移住の研究に取り組む。主な著書に『札幌の社会地図とコミュニティカルテ』(単著、科研費報告書、2008年)、『トランスナショナルな移動と定住一定住化する在日ブラジル人と地域社会』(共著、御茶の水書房、2009年、第4回地域社会学学会賞受賞)。

### 岩見 太市 (いわみ たいち)

1941年生まれ。65年3月同志社大学法学部法律学科卒業。78年長野県真田町に全国初の会員制による社会福祉法人かりがね福祉会を設立、翌年知的障害者生活施設かりがね学園を創設、初代園長。その後、札幌市の医療法人漢仁会医療福祉部長、札幌市社会福祉協議会地域ケア推進部長などを経て、2001年からNPO法人シーズネット理事長。シニア地域福祉研究会主宰、NPO法人シーズネット京都理事長。さっぽろ孤立死ゼロ推進センター所長、北海道福祉環境アドバイザーなど公職多数。主な著書に『人・ささえ合い』『介護保険時代こう生きるこう支える』『高齢期を生きる福祉コミュニティ』。

### 菊谷 秀吉 (きくや ひでよし)

1950年生まれ。73年国際商科大学(現東京国際大学)卒業。73年(株)藤田組入社。81年道建コンサルタント(株)代表取締役。83年伊達市議会議員。91年副議長。93年議長を経て、99年伊達市長(1期)。現在伊達市長(4期)。高齢者にも住みやすい街づくり、伊達ウェルシールド構想を推進。全国市長会副会長、北海道市長会副会長、噴火湾市町村連絡協議会副会長、北海道ニセコ・羊蹄・洞爺周辺リゾート整備推進協議会副会長など公職多数。

### 佐々木 徹 (ささき とおる)

1963年生まれ。87年小樽商科大学卒。87年北陸銀行入行。98年北海道庁保健福祉部、00年釧路支庁地域政策課主任、05年知事政策部主査、09年占冠村地域振興対策室長、11年総合政策部計画推進局主幹、12年から総合政策部地域づくり支援局参事。

### 笹谷 春美 (ささに はるみ)

1946年生まれ。77年北海道大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。78年北海道大学教育学部助手を経て、80年から北海道教育大学(札幌校)に勤務、97年教授、2012年3月定年退職、同大学名誉教授。北海道立女性プラザ館長、日本学術会議連携会員など。この間、公職多数。専門は家族社会学、ジェンダー論、高齢者ケア論。主な著書に『介護予防一北と日本の戦略』(編著、光生館、2009年)、『家族のケア・家族へのケア』(共著、岩波書店、2008年)、『ニーズ中心の福祉社会へ』(共著、医学書院、2008年)。

### 金子 勇 (かねこ いさむ)

1949年福岡県生まれ。九州大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学博士。北海道大学大学院文学研究科教授。専門は社会学。日本社会学会理事・学会賞委員長。札幌市社会福祉審議会委員長。第1回日本計画行政学会賞。第14回日本都市学会賞。単著『都市高齢社会と地域福祉』(ミネルヴァ書房、1993年)、『高齢社会・何がどう変わるか』(講談社、1995年)、『少子化する高齢社会』(NHK出版、2006年)、『社会分析』(ミネルヴァ書房、2009年)、『コミュニティの創造的探求』(新曜社、2011年)、『環境問題の知識社会学』(ミネルヴァ書房、2012年)など。